



進修同窓会 HP にアクセス



つくば市若森からの筑波山
手前は、左端の多気山 (城山) から平沢山に続く
石川重房先生 (「進修」8号) (円内)

筑波山として作る長歌並短歌

1902 [明治 35] 年 1 月、生徒たちと真冬の筑波登山を強行し、雪の五軒茶屋で一夜を明かした石川重房先生でしたが (本紙第 169 号で既述)、先生は何回か筑波山に登られていたようで、1900 年 9 月発行『進修第 2 号』には、筑波登山の折りに詠まれた「筑波山として作る長歌並短歌」が掲載されています。

引用文中の旧字体は新字体に改めました。なお、引用文中の【 】は筆者による注記です。

石川重房先生 (国語 在職 1899 年 12 月 ~ 1907 年 4 月)

土浦中学では、1899 [明治 32] 年 9 月に、国語科の大塚貞三先生が浜松へ転任されること、しばらく後任が決まりませんでした。したが、ようやく同年 12 月に石川先生が着任されました。大塚先生の後任を探していた本校が、白羽の矢を立て、就任を懇請したようです。

先生は、すぐに生徒たちから認められたようで、『進修第 2 号』『雑報』には次のような記事が並んでいます。

「○石川先生 …… 今や吾人はこの博識ある良教師を迎ふるの栄を得たり、良教師とは誰ぞ、本県下笠間の人、石川重房先生こそ、……」

【1900 年】一月八日、講堂に於て挙げ【挙げ】られぬ、福山【義春】教諭は【明治 32 年 12 月に竣工・移転した立田新】校舎の新なるに乗り、学期の新なるに乗り、歳の新なるに乗り、吾人の精神も、亦一致する所なかるべからず、と述べられ、石川教諭は例の快活なる弁もて、公共心に就て諭されて、式は閉されぬ、……」
また、宮城学院女子大学教授菅谷軍次郎 (中 1 回) は、1963 [昭和 38] 年発行『同窓会報 2 号』「思い出の記」に「…… 又石川重房先生は国語の造詣深く、『大鏡』の中の系図など何も見ないで書く。 …… :」と記し、

1944 [昭和 19] 年、海軍主計中將で退役し、戦後 1965 年には歌会始の召人を務めた武井大助 (中 3 回) は、1957 [昭和 32] 年発

行『土浦一高進修新聞 27 号』『師と友と』に「…… 石川重房先生は国語の教師で、稀に見る学殖を有し、講義も又著しい特色を有っていた。自分が古代文学に多少とも興味をもつに至ったのは全く先生の賜ものである。その破帽弊衣も又人目を惹き土浦一の名物であった。 ……」と綴っています。

筑波山として作る長歌並短歌

石川重房

ますかゝみ

【真澄鏡 「見る」「懸く」「磨ぐ」「照る」「清し」「影」「み」を含む語などに掛かる枕詞】

水戸を立ち出て

小車に

【おぐるま 「お」は語調を整える接頭語。口語では「お」、文語では「を」。ここでは、汽車・客車】

真鉄路馳せて

【真鉄まがね】 鉄。くろがね】

角さはふ

【つのさほう 「いは」に掛かる枕詞】

岩間に着きて

みやひふみ

【雅び文 「水戸」と「岩間」とには、それぞれに掛かる枕詞が置かれていることから、「柿岡」の「かき」に掛かる枕詞として、石川先生が創作されたと思われる。】

かき【柿】岡過ぎて

十【里】余り

三つの峠も

【団子石峠 道祖神峠 風返峠】

辛うして

【かろうじて やつと。ようやく】

辿【たど】り超江【こえ】来て

をつく波の

町にやと【宿】りて

朝またき

【朝またき (「まだき」は副詞で、「まだその時期になっていない」の意) まだ夜の明けきらない頃。明け方早く】

おきてゝ【起き出て】見れば

雲霧は

四方【よも】に立ち罩【こめ

大海原

八重の潮路に

孤【ひとり】立つ

離れ小島に

や【遣】らはれし

【派遣された】

我身にもあるか

皇孫の

【こうそん ここでは、瓊瓊杵尊(にぎのみこと)と】

あも【天降】り給ひて

櫛觸の

【くしふる 櫛觸山は日本神話の天孫降臨の行われた聖蹟と伝えられている】

峯に立たして

頓丘を

【ひたおか ひたすらに続く丘】

国寛ましゝ

【くにまぎ 住むのに適する良い国土を探して歩くこと】

折からも

斯くやま【座】しけん

【ます(座す・坐す)「あり」「ある」の尊敬語。いらつしやる】

女神ます

【筑波女大神(伊弉册尊)女体山 877 mに祀る】

東【ひんがし】の峯

男神ます

【筑波男大神(伊弉諾尊)男体山 871 mに祀る】

西の高峯を

かにかくに

見上げにたれば

霧は沸き

雲は迷ひて

くらおかみ【闇靄】(注)

天翔【あまがけ】るごと

身の毛立ち

見る目も凄く

仙人の

浮世の外も

斯【かく】にやと

思ひ出られて

筑波峯は

神の御威稜の

【御威稜 みいつ 「いつ」の尊敬語。天皇・神など

どの御威光】

いちしろ【著】く

くすしき山そ

【くす(奇)し 神秘的だ。霊妙だ】

かしこぎ山そ

【かしこ(畏・恐)し 恐れ多い。尊い。】

千早振神の御代より女男【めお】の神

立たしましけん乎筑波山

【千早振(ちはやぶる)「神」に掛かる枕詞】



柿岡から望む筑波山
風返峠から見る筑波の双峰(左・男体山、右・女体山)(左上)

【注】くらおかみ【闇靄】

闇靄(くらおかみのかみ)。高靄(たかおかみのかみ)とも言う。降雨・止雨を司る龍神であり、雲

を呼び、雨を降らせ、陽を招き、降った雨を地中に蓄えさせて、それを少しずつ適量に湧き出させる働きを司る神。古事記では、伊弉諾尊(伊邪那岐命)が火の神迦具土(かぐつち)を斬ったとき、その剣の柄(つか)からしたたる血が化して生まれたとされる。また日本書紀には次のように記されている。「伊弉諾尊が剣を抜いて、軻遇突智(かぐつち)火の神)を斬って、三つに絶たれた。その一つは雷の神となった。一つは大山祇神(おおやまづみ)となった。一つは高靄となった。」

京都貴船神社の祭神。

この歌は、先生が土浦中学赴任前に水戸から出向いた時に詠まれたようです。中2回山口鼎太郎が1927「昭和2」年9月発行『進修第26号』「雪の五軒茶屋の一

夜(本紙第169号に掲載)の中で「……豪放磊落【ごうほうらいらく】で酒好きの石川重房先生は老体ではあるが、……」と記しているように、先生はずでにかなり御年を召されていたようですが、岩間駅から筑波町の宿まで、10里(約40里)の道程を歩き通す健脚には恐れ入ります。

退職記念品贈呈

1907「明治40」年4月に石川先生が退職されると、土浦在住の卒業生たちが中心となって、感謝状と記念品を贈ることになりました。記念品は銀杯三ツ組、清酒一樽、肴一籃【かご】。6月2日に卒業生代表2名が笠間町の先生のお宅を訪問し、感謝状と記念品とを届けました。越えて4日には、先生からお礼の歌が寄せられています。

土浦中学校卒業生諸君より三ツ組銀杯
酒肴取揃へ添へられければ

呉竹の【「世」に掛かる枕詞】 世々を経る

にも 物事は

改りつゝ 次々に

うつろひ行きて 巧にも

巧みを重ね 近き世は

海の外なる 千万【ちよろず】の

あまたの国と ま【交】じらひを

かはす上から いやが上に

開けも行きて よそほひ【様子 ありさま】

は めでたけれども 千早振

神なから【かんながら 神の御心のままで人為を加えないさま】なる 諸人の心しらひ【心配り】は ひきかへて年月にそへ うすらかに

なり行くめるを 土浦と名に負ひ持たる 学び屋に

雪と螢を むつひ【睦び】つゝ 定め業を 終へにたる

瑞【ずいめでたい】の若子の 百余り 十余り二人の 方々は

世の習はしに 染まずして あかく【私心がない】清けき 上つ世の

なりの儘なる むらきもの【「心」に掛かる枕詞】

心にませは 某【それがし】か 教の道に たつさはり

七年余 経にけるを いたく偲は【しのぼ】ひ 銀【しろかね】の

三つの杯 酒肴 取り揃へつゝ 遙々【はるばる】と

笠間の庵を おとなひて 授け給りぬ某か

悦【よろこび】はしも【「しも」は強意】 譬へんに

物こそ なけれ 朝夕に この杯に 旨酒と

各【おのおの】方の 情とを 受けて 呑みつゝ 千代も経なまし

君方の情と酒をさかつきに うけて呑みつゝ千代も経なまし

重房

(高21回 松井泰寿)